

ノルマン系諸侯ロジャー・ビゴットの所領形成の一側面

——「聖ベネット・オブ・ホルム修道院領の侵奪リスト」を通して——

田 卷 敦 子

はじめに

「ノルマン征服」(一〇六六年)が未曾有の速さで政治的变化をもたらし、ヘイスティングズの戦いから九年間で全イングランドが征服者の手中に把握された、というのが今日では一致した見解とされている⁽¹⁾。しかしノルマン定着に伴う社会的、経済的、そして所領上の変化にかかわることについては未だに諸説がある。それらはいずれもイングランドに侵攻したノルマン人が、全て国王の直属封臣であることを前提に論じられがちであった。本稿では「征服」直後に国王と直属封臣の関係にない者が存在したこと、そして彼らが定着の過程で、いかにアングロ・サクソン人や教会の土地保有状態を混乱させたかについて、考えてみたい。

一章 問題の所在——論点と対象の限定

研究史を顧みると、「征服」後イングランドに上陸した者全てが、ノルマンディ公ウイリアムと封建的主従関係にあったか否かについて、これまでまとまった議論がなされてこなかった。D・C・ダグラスは、一〇六六年ヘイスティングズの戦いに際しノルマンディ公を支えたのは封建制の下に軍事的奉仕義務で召集された軍隊だけでなく、戦うためにかり出された人々の軍があったと述べ、*William of Poitiers* ⁽²⁾ を引用している。

ノルマンディの他の地方、特にメーヌ、ブルターニュ、ピカルディ、ポワトゥーその他ブルゴーニュ、アンジュー及び南部イタリアからも志願兵が公国に合流した。これらの人々の多くはその成功報酬である土地・財産侵奪の見込みに心が動かされたのである。彼らの殆どは傭兵であった。ノルマンディ公ウイリアムが彼らの兵役を得るために成功報酬の約束をしたもの、とされている。⁽³⁾

誰が志願兵であり傭兵であったかを個々に確かめることは難しい。D・C・ダグラスは、ドゥムズデイ・ブックの分析によりイングランドに土地を多く取得した俗界封臣 *lay tenure* を十一名、俗界従臣 *secular followers* 十名を挙げて区別している。⁽⁴⁾

俗界封臣の内、ユースタス *Eustace* ヲンデヴィル *Geoffrey of Mandeville* オブ・マンデヴィル *Alan* 伯を除く全ての者は、一〇四〇年と一〇六六年の間にノルマンディで主君のため顕著な働きをした者たちで、ノルマンディ公ウイリアムと封建的主従関係にあった。一方、俗界従臣は全員が、「征服」後主としてイングランドに領地を獲得し、俗界封臣におとらぬ資産をなした者たちである。彼らは成功報酬の約束の下、「侵奪」と称される手段によって取得したものと考えられる。

侵奪地を視野に入れたノルマン系諸侯の所領獲得の詳細な実体に関しては、これまで十分に考察されなかったように思われる。⁽⁵⁾ 侵奪に関する史料があまり残存していないためである。

ドゥムズデイ・ブックは、国王ウイリアム一世（在位一〇六六〜八七）の命に基づき、一〇八五年よりほぼ一年をかけ

て作成された全国規模の土地台帳である。羊皮紙の二巻本より成り、第一巻 (Great Domesday) はウインチェスターで一人の法の専門家が編集したといわれる。一方、第二巻 (Little Domesday) は、法的知識の少ないいわば法専門家ではないイースト・アングリアの調査使節団による報告で、ノーフォーク、サフォークおよびエセックスの三州を対象としている。⁽⁶⁾ この第二巻の三州に限って報告の最後に *Invasiones* (侵奪) の項がある。⁽⁷⁾ すなわち、エセックスの侵奪の項は、エセックスにおける土地不法占拠の (申告されたかぎりにおいて) 「事実」を記録しており、⁽⁸⁾ またノーフォークの侵奪の項には「これらの土地は征服王から与えられるべき保有権なしに所有している。即ち、彼らは国王の権限に基づく州長官によって認可もされていないし、州長官の法務委員会の承認もなければ、州庁官の令状や指令もない。それ故彼らは略奪者もしくは侵略者であり、正当な所有権なしで所有しているもので、侵奪と呼ばれる土地である」とある。⁽⁹⁾

本稿は以上のような問題関心に基つき、「征服」後、侵奪によって惹起された社会経済的变化の一端を明らかにしようとするものである。しかしながらこうした問題を、全イングランドにわたって論及することはできない。というのもノルマン人の定着及びその構造は地域的諸条件によって異なるからである。そこで実際の分析に際しては、考察の対象地域を、リトル・ドウムズディ・ブックに侵奪の項が付記されていること、史料「ロジャー・ビゴットと家臣が聖ベネット・オブ・ホルム修道院から侵奪した土地のリスト」が存在することから、ノーフォーク (州) に限定することにする。

とりわけノーフォークに最も多くの所領を獲得したノルマン系諸侯で俗界封臣の一人、ロジャー・ビゴット Roger Bigod を主な対象とする。『アングロ・サクソン年代記』によるとロジャー・ビゴットは、「反逆者たちの一人はロジャーと呼ばれ、彼はノーリッチの城を不意打ちし、そしてその地域全体にわたって悪業の限りをつくした。」⁽¹⁰⁾ と記されている人物であった。以下、まずビゴット家について簡単に説明しておこう。

ビゴット家がイースト・アングリアにやって来たのは、父ロバート・ビゴットの時である。「征服」前の十年間、下級騎士ロバート・ビゴットはノルマンディ、カルバドス地方のバイユー司教オドーの陪臣であった。一〇六六年にヘイステ

イングズの戦いに傭兵として従軍。果敢に戦い、征服王ウィリアムよりノーフォークに領地を与えられた。一〇六九年、ロバート・マレットとノーフォーク伯ラルフ・ド・ゲールと共に、デンマークのスウェンをイプスウィッチの近郊で破り、その領地を与えられた。息子ロジャー・ビゴットについては、母はカルバドス教区の村娘と記されるのみで、生年不詳、兄弟はない。ロジャー・ビゴットの名前が公文書の記録に表われるのは一〇七四～五年頃からである。当時は十二歳で成人とみなされたという。⁽¹²⁾従って父ロバートが一〇七一年カルバドスで死亡した時、息子は十歳に達していなかったと思われる。

以下行論においては、(一) ノーフォークにおけるロジャー・ビゴットの侵奪、(二) ロジャー・ビゴットと地下資源利用、(三) ロジャー・ビゴットの所領形成、以上の三課題に沿ってトポグラフィカル手法を用い、⁽¹³⁾実証的検討を行う。

二章 ノルマン系諸侯によるノーフォークにおける侵奪

二―一 史料としてのドウムズデイ・ブックの限界

ドウムズデイ・ブックは全国的土地調査としては唯一同時代的史料である。しかし、ドウムズデイ調査はその目的から「荘園の規模」に重点がおかれた。調査質問の内容は類別すると以下の三点に分かれた。

- 保有権についての質問。即ち当該荘園の保有権を直接国王から与えられているのは誰か。
- 荘園住民の身分構成についての質問。つまり領主の家臣、自由民、ソックマン、農奴、小屋住農、奴隷の数。
- 荘園の生産力についての質問。すなわちハイド数、⁽¹⁴⁾犁隊数、森林の広さ、放牧地と牧草地の広さ、水車の数、漁場の数、塩田の数、そして荘園の価値はどれくらいか。

以上、結果として農業に偏重しがちであった。ノーフォークには、この質問の範疇に入らず、また該当しない産出物があ

った。それは種々多様な地下資源である。

アーサー・ヤング Arthur Young の計算によれば、ノーフォーク州は総面積一八三〇平方マイル、その内、種々のローム（沃土）からなる地が九〇〇、良質ローム一四八、良質砂四二〇、軽砂二二〇、沼沢地粘土六〇、そしてピート（泥炭）八二平方マイルである。一九世紀にアーサー・ヤングが計算した当時、ノーフォーク全土の三分の二は耕作・牧畜用地であった。その内の一三〇〇〇〇エーカーは放牧地 *pasture* と牧草地 *meadow* である。⁽¹⁵⁾ 州全体にイエア Yare 川、ビュア Bure 川、ウェブニィ Weweny 川、ウェンサム Wensum 川、ウィッセイ Wissey 川などが、なだらかな丘陵地と平野の間を這うようにゆるやかに流れ、川の両側には川幅より広い河川敷が広がる。ある時は川になったり土地になったり、その境目がはつきりしない。東部海岸線に近い沼沢地 Fen、沼地 Marsh、湿地、草地は海拔ゼロメートル地帯である。歩行可能で肥沃な牧草地帯であるが、季節によって浸水し、こちらも土地との境目がはつきりしない。そして地下資源の多くは、これらの河川敷、沼沢地、沼地、湿地、草地の下に埋蔵されていた。

このような事情と関係しているのであるが、アングロ・サクソン時代以前からイースト・アングリア地方の地主たちは自分の土地を区画したり、境界を決めたりする習慣がなかった。ノーフォークの荘園領主たちは、地下資源の所在を牧草地かまたは放牧地の名目で報告し、ドウムズデイ調査使節団の目をそらしたものと考えられる。⁽¹⁶⁾ さらに H. C. Derby によれば、ドウムズデイ・ブックには記載されていない領地があるという。

例えば East Flegg, West Flegg ハンドレッドのドウムズデイ統計をみると、牧草地のエーカー数は、羊の数に對比すると不自然である。マーサム Martham（村）は、羊数がゼロであるにもかかわらず、牧草地一一四エーカーと記載されている。同様に Filby, Rollesby, Burgh の集落は、羊数はゼロであるにもかかわらず牧草地は三五、二二、五一エーカーと記載されている。勿論、牛その他の家畜もいたが数える程度にすぎない。これらの集落では燃料としてピート（泥炭）の採掘が盛んに行われていた。九世紀半から三五〇年間にわたり掘り続けられた結果、その跡が沼 broad となり、互いにつな

がつて大きなトリニティ・ブロードが形成された。⁽¹⁷⁾しかしドウムズデイ・ブックにはピートは記載されていない。結果論になるが、これまで述べてきたような特殊な地形と地質や土地保有の慣行が、ノーフォークに「侵奪」をまねきやすくしたのかもしれない。

二―二 ノルマン系諸侯らの侵奪の傾向

ノルマン系諸侯らによる侵奪は、手当たり次第に行われたのか、それとも何らかのねらいを定めたものであったのだろうか。二―二ではそれについて明らかにしてみたい。

「征服」前のノーフォークには、前国王のセインthegnが多数おり、その頃地方のリーダー的存在であった大荘園領主エルガーAlgar伯、ジャースGyrth伯、ラルフRalph伯の勢力下に置かれていた。「征服」後、征服王ウィリアムの配下になったセインは八八名であった。⁽¹⁸⁾その中に聖界領主、聖ベネット・オブ・ホルム、ベリー・セント・エドモンズ、イーリイ、ラムゼイの各修道院長も含まれていた。征服王ウィリアムは抵抗したり逃亡したりしたサクソン貴族やセインを除き、現地住民の土地は取り上げなかった。そして州長官sheriffとその代官reeveには現地のセインを用いた。一〇八六年時、当該州に所領を保有した国王の直属封臣は、ノルマン系諸侯三九名に対し、現地住民（サクソン系、デーン系、イングリッシュ）は四四名を数える。⁽¹⁹⁾現地住民の方が多かったのである。

一方、ドウムズデイ・ブックに記された侵奪者十六名は、全てノルマン系諸侯である。（表1）を参照されたい。ここではその中の一人について記しておこう。

ハーマー・ド・フェレーズHerner de Ferresは、この州の自由民の土地を最も多く不法に侵奪した人物とされる。⁽²⁰⁾彼は一〇八六年以後も侵奪を続け、侵奪者ハーマーInvathio Herneriの異名をもつ。⁽²¹⁾ハーマーは征服時の戦功によりノーフォークに二二荘園を与えられていた。その多くはアングロ・サクソンの自由民Thorketelが一〇六六年以前に所有してい

た荘園であった。彼は侵奪によりほぼ同数の荘園を獲得したといわれている⁽²²⁾。ノーフォークにおける教区教会などの分布によれば、Farsham, N. Greenhoe, Grimshoe, Freebridge Marshlandの各ハンドレッドには村落に一つずつ教区教会があり、その一方、Clackclose、Depwade、Gallow、Hensteadの各ハンドレッドには集落の数に比べて多数の教会があった⁽²³⁾。侵奪したものも含めたハーマーの所領分布は、教会が多い地域に集中している⁽²⁴⁾。彼の侵奪のねらいは教会の土地glebelandであった⁽²⁵⁾。ハーマーが集落よりも教会荘園の獲得に固執した証拠として、次の例が挙げられよう。

(例一) Wrenningham 教区: 一〇六六年以前はセインの Leofwold が保有していた Wrenningham の三カルケイトの土地と十二エーカーを Wagen が保有。二農奴、十四小屋住農、一奴隷。三犁隊、一耕作民、牧草地十六エーカー、十六頭の豚のいる森林。その中の教会と十二エーカーの教会荘園のみをハーマーが所有している。Leofwold はハーマーの家臣になった。(J. Morris ed., *Domesday Book*, Norfolk, London & Chichester, 1984, (以下 DB ii と略記), 208b) (傍線は筆者による。以下も同様。)

(例二) Litcham 教区: 一〇六六年以前から自由民 Thorketel が Litcham の三カルケイトの土地を荘園として保有していた。三農奴、三小屋住農、四奴隷、牧草地八エーカー。二犁隊、一耕作民、七頭の豚がいる森林、一水車。その中にある教会と四エーカーの教会荘園のみをハーマーが所有している。(DB ii, 207b)

(例三) Ellingham Magna 教区: Wrenbold が、一〇六六年以前に自由民 Thorketel が保有していた Great Ellingham の三カルケイトの土地を保有。三農奴、二小屋住農、五奴隷、百頭の豚がいる森林、牧草地三十エーカー、三犁隊と領地。その中にある一教会と十二エーカーの教会荘園のみをハーマーが所有している。(DB ii, 207a)

他のノルマン系諸侯らも大なり小なり教区教会と教会荘園と修道院荘園に固執しており、侵奪の傾向として、集中的に聖界所領が狙われたとみてよいのではないだろうか。

三章 ロジャー・ビゴットの侵奪と地下資源

本章では、聖ベネット・オブ・ホルム修道院⁽²⁶⁾とその所領を襲ったロジャー・ビゴットと家臣をとり上げてみよう。

三―一 史料

所在：ブリテッシュ・ライブラリ所蔵 (MS. Cott. Galba, E. II.)

形状：二二二枚のフォリオから構成（その中の205r） 十四世紀の写本、Cartulary. Cotton.

内容：St. Benet of Holme Abbeyの記録簿 一〇二〇―一二二〇年間の記録類。ラテン語。

一九二二年に、F・M・ステントンによって、同修道院記録簿の中から発見された⁽²⁷⁾。その後、J・R・ウェストの学位論文『聖ベネット・オブ・ホルム一〇二〇―一二二〇』が書かれ、その巻末に史料の原文（ラテン語）が記載されている⁽²⁸⁾。ステントンによれば、現存していないがオリジナルは、内容から判断して、一一〇一年十月、修道院長Richerが選出された頃からビゴットが一一〇七年に死亡するまでの間に書かれたものであり、真正なものと判断できるといふ。内容は、修道院長Richerの依頼により作製された、「ロジャー・ビゴットとその家臣により聖ベネット・オブ・ホルム修道院から侵奪した土地のリスト List of encroachments on the Abbey's lands by Roger Bigod and his men（以下「聖ベネット・オブ・ホルム修道院領の侵奪リスト」と略記）」である。このリストに書かれた土地を、ビゴットの所領分布をノーフォークの地下資源分布図に重ね合わせた地図にプロットしてみるとどうなるか、次に検討してみよう。

三―二 史料のトポグラフィカルな分析

近年、イースト・アングリア地方史研究においては、これまでの歴史地誌学の成果や歴史考古学的調査にもとづく歴史地図historical atlasの作成による、地域ごとの実証研究が盛んに行われている。まず史料や史跡にもとづく歴史地図が作成され、その地図から目立った事象や現象を読みとり、地誌学的データや文献史学の成果と照らし合わせ総合することで、

新たな歴史的事実に光をあてる。これら全体の作業が、トポグラフィカル歴史分析と称される⁽²⁹⁾。本稿はこの研究手法を用いる。

作業の流れとしては、最初にノーフォーク・ドウムズデイ・ブックより、ロジャー・ビゴットの所領分布図を作成した。次にドウムズデイ・ブック記載の侵奪地十六ヶ所(表2参照)と、聖ベネット・オブ・ホルム修道院からの侵奪地四ヶ所を所領分布図に加えてみた。それによるとビゴット家の所領は大きく分けて四地域に集中していた(図1参照)。これをノーフォークの土壤分布図と照合してみた⁽³⁰⁾(図2参照)。その結果、ビゴット家の所領分布、とりわけ侵奪地の分布が、有用な土壤や地下資源の分布に、かなり一致しているという傾向が判明した。以下ではそれら四地域を順に具体的にみてゆくこととしたい。即ち「A」フリント・粘土、「B」ローム、「C」ピート・粘土、「D」石灰、の各地帯である。ただし実際には数種の土壤が幾層にも混在しており、便宜上の区分であることを断っておく。

「A」フリント・粘土地帯 Flint & Clay Regions (ノーフォーク南西部)

ビゴットの所領はノーフォーク西部、セットフォードをとり囲むセットThet川とウィッセイ川の流域、及びセット川の南を流れるリトル・オウゼ Little Ouse 川の周辺の地域に分布し、Guilthorpe, Shropham, Wayland, Launditch, S. Greenhoe の各ハンドレッド内に位置する。これらの地域、とりわけセット川とウィッセイ川に挟まれた地域には、古くからフリントの採掘地があり、その水運の拠点でもあった。例えば、セットフォードから北へ十六キロメートル行った処に、フリント(地下) 鉱跡グリムス・グレイヴス Grimes Graves があり、周囲約九〇エーカーにわたり採掘された跡がある⁽³¹⁾。

この地域では後期石器時代か青銅器時代からフリントを産出していた。フリントで作られたBC六〇〇〇年からBC二五〇〇年頃の矢じり、手斧、ナイフ等が出土している。フリントと粘土 boulder clay は混在するという特徴があり、近く

から必ず一緒に土器の壺や甕が出土しているので年代を同定しやすい。また、紀元一世紀、ノーフォークにはフリントを用いたローマ街道が敷かれたという。ノーリッチ近郊に築かれたローマ人の都市はフリントと粘土の段層で積まれた市壁で四方を囲まれていたし、同時代のバラ・カッスルの城壁もフリントと粘土の段層式であった。中世にはいり、ベータの時代、六三〇年頃に、Furseyという名の聖人がアイルランドからバラ・カッスルに来て修道院を建てた。その外壁はフリントを粘土で接着させていくアイルランド方式であり、この時以来ノーフォークの教会建築にはフリントが使われるようになった。例えば「征服」以前からあったイースト・アングリアのベネディクト派修道院である、ピーターバラ、イーレイ、ラムゼイ、ベリー・セント・エドモンズ、聖ベネット・オブ・ホルムの各修道院の建物には全てフリントが使われている。⁽³²⁾一世紀における教会建築とフリントとの関係については三―三で後述するが、ビゴット家の所領分布は、これからフリント産地に近く、しかもそれを運搬する水運上の拠点に位置している点で留意に値する。

〔B〕 ローム地帯Loam Regions (ノーフォーク北東部)

この地域のビゴットの所領はノーフォーク北部クローマー港からヤーマス港へ流れるビュア川の上流地域に集中し、North Erpingham, South Erpingham, Holtの各ハンドレッド内に位置している。

中世におけるロームの用途は (一) 肥沃な土壌として、(二) 建築資材として、利用された。

(一) 表層がロームの場合、肥沃な土壌が耕作に適していた。ノーフォークでは、フレッグFleggハンドレッドと上記に挙げた隣接する地方は、この肥沃なローム土壌により、作物が豊かに実った。ドウムズデイ調査当時、フレッグの人口密度は他の地方の二―三倍であり、⁽³³⁾イングランドで最も豊かな土地といわれた。⁽³⁴⁾このローム土壌による農業生産の豊かさが、中世においては荘園の形態を支配した、といわれている。⁽³⁵⁾

(二) ロームは、砂、沈泥、粘土がほぼ等量に混合した土壌である。それゆえ、コンクリートやセメント代わりの資材に

なった。城壁や教会の外壁など、フリントとフリントを積み重ねる上で、ロームは必要不可欠な資材であった。また木造家屋には、柱と柱の間にロームと木屑を混ぜたものを壁として使用し、その表面を石灰で塗装した。ちょうど日本の民家の土壁に近い構造である。実際に小作農の木造家屋 timber-framed house が Godwick に現存しており、このロームと木屑の混合壁が観察できる⁽³⁶⁾。

〔C〕 ピート・粘土地帯 Peat and Clay Regions (ノーフォーク東海岸部)

ビゴットの所領はノーフォーク東部海岸側の沼沢地、Ormesby 沼、Filby 沼、Rollesby 沼の周辺地域に分布し、Happing, W. Flegg, Tunstead の各ハンドレッド内に位置している。

一〇二〇年から Ludham には聖ベネット・オブ・ホルム修道院が建っており、周辺の Burgh, Oby, Ashby, Thurne, Rollesby, Winterton には同修道院長の荘園があった。それら確実な資源から豊富にピートが供給され、特に九世紀半ばから燃料として、ピートの切り出しが発達し、川や沼の沿岸が掘り進められ、同修道院の経済的基盤を支えた⁽³⁷⁾。また Rollesby 沼と Ormesby 沼と Filby 沼、これらは中世に三五〇年間もピートを切り出したため、その跡が沼となったものである。このことは一九五三年に初めて J. N. Jennings と J. M. Lambert の研究によって明らかにされた⁽³⁸⁾。ビゴットは、同修道院のこれらの荘園やその周辺地域を侵奪している。

〔D〕 石灰地帯 Chalk Regions (ノーフォーク南東部及び北部)

ノーリッチ市からビュア川にそって北上し、北部海岸までの広い地域、Humbleyard, Blofield, Tavenham, Eynesford, Holt の各ハンドレッドを含むこれら一帯は、石灰岩 chalk の上に成り立っていた⁽³⁹⁾。北部海岸にはドーバーと同様に白亜(石灰岩)の断崖が連なっている⁽⁴⁰⁾。ノーリッチ自体が石灰岩の上に成り立っており、アングロ・サクソン時代より数世紀

にわたって採掘された跡がある。一八〇〇年代に井戸掘りの際、石灰岩採掘のトンネルが発見され、また一九九〇年代には、道路や建設現場が陥没する事故が起きている⁽⁴¹⁾。

石造建築の石と石を密着させるにはモルタルが必要で、それは石灰岩から作られた。工程は、まず大きな釜（石灰炉）の中で石灰岩を焼き、石灰をとる。熱を冷ますために、土の中の広い穴に入れて水をかける。数ヶ月間水に浸しておくとするぬるした練り粉になる。それを良質のモルタルにするには良質の砂を混ぜ合わせなければならない。ノーフォークの北部海岸には良砂地帯があったから、おそらくそれらが用いられたことであろう。

ロジャー・ビゴットはどこよりも真つ先にノーリッチを襲い、十二世紀初頭まで半世紀にわたって占有した。ノーリッチを囲むようにウエンサム川が流れ、豊富な石灰岩、石灰炉に必要な川の水、北部良砂地帯からノーリッチまでの水運など地下資源を利用し利益をあげるために必要な条件が、「侵奪」により揃っていたことになる。

以上四地域の地下資源分布とビゴット家所領の分布が一致しているという現象は、ビゴット家が、これら地下資源を積極的に利用して利益を得ようとしていたのではないかという推測を抱かせるのに十分ではないだろうか。

三―三 宗教的建造物ブーム

三―三ではロジャー・ビゴットの地下資源利用を視野に入れ、その時代背景として宗教的建造物ブームをみてみよう。「ノルマン征服」から約一世紀半の間に、イングランドでは修道院の数は約六〇から約七〇〇に増え、他方、修道士・修道女・修道参事会会員の数は約一〇〇〇人から約一五〇〇〇人に増大した⁽⁴²⁾。同様に教区教会が増加した時期でもあり、その数は約四〇〇〇とも、四五一一とも言われている⁽⁴³⁾。イングランド侵略と征服に参加したノルマンディ及びその周辺地域の諸侯や騎士は、それに続く侵奪で多大な土地をイングランドに獲得した。彼らはその獲得した土地に教区教会 parish churchを建て、あるいは修道院 prioryを創建した。とくに諸侯らは独特の熱心さをもって修道院創建を行い、宗教的建造

物ブームとも呼ぶべき歴史的な社会現象を生んだ。一〇八六年には、既にノーリッチには二六教会と二八礼拝堂、セツトフォードには十三教会、その他ノーフォーク全体で二五〇教会、合計三一七の教区教会が建てられていた。また国王ウィリアム一世の治世からヘンリー一世の治世までの約五十年間に、ノルマン系諸侯らが創建した修道院は十六にのぼった。⁽⁴⁴⁾一つの修道院が完成するまでに最低四年から十年以上を要したから、州のあちらこちらから建設の槌の音が絶え間なく響いていたであろう。彼らはこれを建てるに要した多種多量の建築資材をどこから調達したのだろうか。そしてこれら建築資材は建築現場までどのようにして運ばれたのだろうか。フリントを例に考えてみたい。

ノーフォークの宗教的建造物の骨格と外壁を兼ねる部分には、ほとんどの場合、硬質のフリントが使われた。フリントとフリントを積み重ねるのにローム、石灰、粘土を使う方法は、前述したように七世紀に伝来し、それ以来ノーフォークの教会建築にはフリントが使われるようになり、現在に至るまで、広くこの地方の宗教的建造物を特徴づけている。中世ノーフォークとサフォークの経済発展の差は、フリント鉱の有無にあったといわれる。ちなみに「ノルマン征服」後においても、サフォークの教会、修道院その他の建造にはグリムス・グレイヴス産出のフリントが使われていたことが証明されている。⁽⁴⁵⁾このように重要な建築資材であったフリントとビゴット家との関係を次節でみることにしよう。

三―四 ロジャー・ビゴットの地下資源利用と資産形成

三―四ではロジャー・ビゴットがフリントの採掘場を独占していた様子を見てみよう。

フリントの採掘場は、セツトフォードの北へ十六キロ行った処に、周囲九〇エーカーにわたっていた(図1参照)。フリント鉱グリムス・グレイヴスへの道は、セツトフォードから西北へ約十キロ進みリンフォード Lynford へ、そしてそこから一本道で五キロ先にある。ドウムズディ・ブツクの記載によれば、リンフォードはロジャー・ビゴットが所有し、エイルウイの息子スタナードがロジャー・ビゴットから再下封されて保有していた。内容は、一自由民、六十エーカーの土

地、二分の一犂隊、一奴隸、牧場三エーカーである。⁽⁴⁶⁾ ロジャー・ビゴットの側近スタナードがリンフォードを押さえていたということは、グリムス・グレイヴスのフrint鋳造地帯をビゴット家が支配していたということになる。

近年、セットフォード考古学研究グループが活発に、中世セットフォードの集落と河川との相互関係について調査をしている。河川の沈殿物を調べたところ、中世に河川の開発と利用があったことが示された。出土品を識別すると、地下資源の運搬に川、運河など水路を利用したことがわかった。⁽⁴⁷⁾ フrintの輸送経路を見ると、グリムス・グレイヴスからリンフォードを通ってセットフォードへ出たあと、セットフォードからリトル・オウゼ川を通って北のキングス・リンへ運ぶルートと、上流をさかのぼりウェブニイ川を通って東のグレイト・ヤーマスへ運ぶルートとがあった。⁽⁴⁸⁾ これらのルートがあればイースト・アングリアはもちろんのこと、海路でイングランド全土への輸送が可能である。販路の可能性も充分にあったことになる。

教会や修道院や大聖堂の建設が決まると、石工をはじめ人夫がその場所に作業小屋を建てて移り住んだ。そして建築資材の採掘場と現場を結び運河や水路が掘られた。教会建築資材の岩石、石、砂、粘土などは重量があり、人々はどのような遠回りになろうとも水路で運搬した。この理由でビゴット家とその従臣たちは、水路の妨害を最も恐れた。彼らは、水上拠点となる集落を次々に侵奪し、一大ネットワークを形成した。従臣たちは互いに利権を守るため、ビゴット家との主従関係を深めたものと思われる。

ところで教会や修道院を建てるのに必要なものは、「A」地帯のフrintだけではなかった。先に述べたようにフrintとフrintを積み重ねるにも、石と石を密着させるにも、モルタルや石灰や粘土が必要であった。「B」ローム地帯からはロームを、「C」ピート・粘土地帯からは沼沢地粘土を、「D」石灰地帯からは石灰とモルタルが調達されたものと考えられる。これら宗教的建造物ブームを背景に地下資源採掘とその加工は大きな利益をあげたものと考えられる。「ノルマン征服」後のイングランドで、十五位から五位に位置する富裕な家系として上昇するのはロジャー・ビゴットの代であ

った。ビゴット家の経済的繁栄は、次章四―二で述べるように国王による恩顧と土地侵奪にその多くをよっているとはいえ、このような宗教的建造物ブームに裏付けされた地下資源採掘とも無関係ではなからう。

四章 ロジャー・ビゴットの所領形成と侵奪

四―一 ノーフォークの「自由民」

「聖ベネット・オブ・ホルム修道院領の侵奪リスト」(表3)を分析した結果、ロジャー・ビゴットと家臣が侵奪したのは土地だけでなかったことがわかる。約四五名の自由民とソックマンとその家族、そして各々が抱える小屋住農、奴隷などかなりの数の人間が略奪されている。個々の侵奪地は規模が小さいものが多く、おそらく地下資源採掘場だったのではないかと考えられる。粘土、ローム、ピートの採掘場は、通常の形態では自由民が一人当たり二エーカー、二・五エーカー、三エーカーに区切られた土地を保有し、彼らは土地の一角に作業小屋兼用の家屋を設け、採掘用と思われる道具一式と運搬用の荷車等を揃えていたと考えられる。彼らはまた配下に数名の小屋住農や奴隷を抱えていた。自由民が五、六人から十二人のグループで十二、十五、二十エーカーを保有する形態はピートの採掘現場に多い。ピートにせよ、フリントにせよ、地下資源の採掘作業は苛酷でかつ熟練を要したから、そのために人材の確保が必要だったのではないか。それは聖ベネット・オブ・ホルム修道院側にとっても同じことが言えた。同修道院の土地は侵奪されたが、それが非常に損害というわけでもなかった。それよりもテナントである自由民の忠誠心と奉仕の撤回の方が深刻な損失であったという。⁽⁴⁹⁾「聖ベネット・オブ・ホルム修道院領の侵奪リスト」が、同修道院側で作成された記録であることに留意されたい。

ノーフォークは自由民とソックマンの占める比率が他州と比べて著しく高いことが、研究者たちにしばしば指摘されてきた。⁽⁵⁰⁾また、標準的な自由民の誰もが土地保有をしているわけではないこと、所有地について関心の低さ、領主と自由民

を一体化する結びつきとして現金取引の普及、なども指摘されている。⁽⁵¹⁾これらは、牧畜を含めた農耕地経営というよりも、地下資源利用にもとづく経営体を想定するならば、より理解しやすいのではないだろうか。自由民は採掘現場から別の採掘現場へと移り住むことができたし、地下資源の埋蔵量には限界があるから、一ヶ所を保有しそこに留まることに固執しなかったのではなからうか。⁽⁵²⁾さらに領主と自由民の間での「臣従の誓い」行為に関しては、「ノルマン征服」後に書かれた如何なる文書にも見当たらないという。⁽⁵³⁾十一世紀の支配的な所領経営方法は請負制であった。請負制はとくに聖界所領において顕著で、ノーフォークの修道院もその例に漏れない。例えば聖界領主である聖ベネット・オブ・ホルム修道院長と、自由民との間に「ノルマン征服」以前から現金取引が行われていた。これにより聖界所領の自由民は、自立と上昇をうながされて、俗界所領におけるセイン層に匹敵する者が現われた。例えば自由民ウルフキテル Ulfketel はその代表的存在である。イースト・アングリアでは教区教会の所有主を確定できないことがある。こうした場合、教会荘園は自由民が所有していた。これは領主と荘園をもたない集落があり、自由民だけで成り立っていたためである。例えば、ピートの採掘地 Thrigby (East Flegg), Repps (West Flegg) には荘園がないし、⁽⁵⁴⁾領主もない。ロジャー・ビゴットと家臣たちはこのような現地の自由民との間に直接、契約を結んだものと思われる。

ドウムズデイ・ブックには直属封臣各々の荘園数と評価価値 value が記されているが、D・R・ロフによれば、ノーフォークの場合、荘園の評価価値の内容は近代的な意味とは全く異なっていた。即ち、荘園は自由民に貸し出され、賃貸契約としてお金が自由民から支払われていた。従って荘園の評価価値とは、年貢として支払われた単に現金の価格であったという。そのため、封建的領主制はノーフォークに関する限り、十分に達成されたとは言い難い、と D・R・ロフは言っている。⁽⁵⁵⁾ロフの指摘するノーフォークに関する特殊事情について、地下資源利用とあわせて今後検討されるべき問題であろう。

四―二 ロジャー・ビゴットの所領形成と侵奪

ロジャー・ビゴットはどのように所領形成をしたか、「聖ベネット・オブ・ホルム修道院領の侵奪リスト」(表3参照)を時間軸に沿って分析してみよう。

彼は一〇七四年、ノーフォーク伯ラルフ・ド・ゲールの反乱の時、国王軍に加わり戦功をたてた。征服王ウィリアムはラルフの土地を没収し、その管理をロジャー・ビゴットにまかせた。それ以前に征服王ウィリアム一世は州長官に前国王のセインであるセットフォードのエイルウィを、代官には同ウルフを任命していた。州長官職には二つの基本的な権限が付与されていた。国王が封建領主として各州に所有する王領地を管理する義務、即ち王領地農民より封建地代を徴収する権限と、州裁判所の主宰および裁判収益を徴集する権限である。⁽⁵⁶⁾「ノルマン征服」直後に王領地の他、エイルウィ自身が公的地位を利用して逃亡者等の土地と領民を獲得した。また同修道院のWest Flegg ハンドレッドにある所領を含む十三教区とEast Flegg ハンドレッドにある五教区は、一〇六六年以前の管理者エイルウィと息子のスタナードが侵奪したものである。

ビゴットは、「王領地の管理者は即ち州長官である」としてその職権を主張し、前任者エイルウィからエイルウィが侵奪した土地も含めて全てを奪った。エイルウィはビゴットの家臣になり、息子スタナードはビゴットの側近になった。⁽⁵⁷⁾同様にビゴットは代官ウルフの全所領をも奪い、ウルフはビゴットの家臣になった。

「征服」直後、Ludhamにある所領は、一〇六六年以前の管理者であった前王のセインのオズワルドが侵奪した。同じく前王のセインであったウォラーラン、ベイシングムのエイルウィン、ゴウティ、ウルフらも同様に、自分たちが管理していた領地と自由民を侵奪した。これを「王領地の管理者は即ち州長官である」と主張するロジャー・ビゴットが横領し、オズワルド以下、全員はビゴットの家臣になった。これに対し、ロジャー・ビゴットの家臣ノルマン系騎士イヴォ・デ・ヴェルダン、ウォルター・カヌート、コレスロードは、Tunstead, Happing, Henstead, Depwade, N. Erpingham の各ハン

ドレッドを管理するセインを襲い、ビゴットの家臣にした。この様にして一〇七四―一〇八六年の間、ロジャー・ビゴットの家臣になった元セインは十三名いた⁽⁵⁸⁾(表2参照)。

一〇八二年、バイユー司教オドーの反乱後、征服王ウィリアムはオドーの所有地を没収して王領地としその管理者にロジャー・ビゴットを任命した。ビゴットはこの時、託身と誠実宣誓の「臣従の礼」をつくし、国王の直属封臣となった⁽⁵⁹⁾。そして国王から封としてオドーの荘園三九ヶ所が下封され、十八ヶ所がビゴットの家臣に再下封された。その他、かつてアングロ・サクソン貴族が所有していた多くの荘園も、オドーを経てビゴットに渡った。この外に、他のノルマン系諸侯らからの再下封地も全てビゴットの封土となった。

またビゴットが不法に横領していた、セツトフォードのエイルウィ、ウルフ、ノーマンなど元セインの荘園すべては、ビゴットが国王の直属封臣として所有する土地に変わった。こうしてロジャー・ビゴットは、ノーフォークの六二名の直属封臣中、最多の一八七荘園を所有する大領主になったのである。

おわりに

以上、史料「聖ベネット・オブ・ホルム修道院領の侵奪リスト」を通して、ノルマン系諸侯ロジャー・ビゴットとその家臣、そしてロジャー・ビゴットの家臣に組み込まれる前国王のセインがそれぞれの状況下で聖界所領の侵奪を行ったことについて概観した。こうした手段で獲得した土地は、決して封土として封建制の土地保有構造の中に組み込まれることはなかった。それはあくまでもドウムズデイ・ブックにあるように、国王から与えられるべき保有権なしに不法に占拠し、所有しているもので、侵奪と呼ばれる土地であったからである⁽⁶¹⁾。

イングランド各地で侵奪を繰り返していたのは俗界従臣たちだけではなかった。「征服」直後からウィリアム一世の異

父弟、バイユー司教オドーをはじめとするノルマン系諸侯たちは、古い歴史をもつ修道院など聖界所領を激しく侵奪した。⁽⁶²⁾これに対し、一〇七〇年にカンタベリ大司教座に就いたランフランク Lantfranc は、侵奪所領の回復と教会の諸特権の明確化のために、法廷闘争を開始した。教皇使節シオン司教エルメンフリッドが派遣され、ヘイスティングズの戦いに関与した者に対し、一〇七〇年五月、「悔い改めの法令一〇七〇」が布告された。同法令十三項には次のようにあった。

「教会及びそれに類する組織への侵奪についても同様である。教会の所有物が何であれ、それを持ち出した者はできる限りその持ち出した物を元のところに返還しなさい。もしそれができないならば、他所の教会に返しなさい。さらにそれを元に戻そうとしない時は、司教はそれを売らせないように、また誰も買わないように命令しなさい。」

侵奪者たちは各司教区の司教の法廷に召喚され、教会の「悔い改め」の手順に則して裁かれ、贖罪として侵奪地の返還を命ぜられたのである。⁽⁶³⁾同様にノーリッチ司教区では司教ハーバート・ロジंगा（在位一〇九一―一一一九）が司教区改革運動に着手した。⁽⁶⁴⁾目標は侵奪された聖界所領の回復であった。「聖ベネット・オブ・ホルム修道院領の侵奪リスト」はこの時、修道院側が作成したものである。この流れで考えるならば、このリストは侵奪者を告発するための一種の被害届だったのではなからうか。

(1) D. Roife, "From Thegnage to Barony: Sake and Soke, Title, and Tenant-in-Chief", *Anglo-Norman Studies*, XII, 1989, pp. 157-176. また川北稔編『イギリス史』山川出版社、一九九八、四九頁を参る。

(2) William of Poitiers, *Gesta Guillelmi Ducis Normannorum et Regis Anglorum*, ed. R. Foreville, 1952. William of Poitiers: ノルマン征服の歴史に関する著名な二人のノルマン側原典作者のうちの一人。一〇六六年の大戦と征服に関して最も重要な著作である本書は一〇七〇年に書かれたらしい。後にOrderic Vitalisが彼の著作の多くを引用している。一〇七七年死去。(R. A. Brown, *The Norman Conquest of England, Sources and Documents*, Woodbridge, Suffolk, 1984, pp. 15-41.)

(3) D. C. Douglas, William the Conqueror. *The Norman Impact upon England*. Berkeley, 1964. pp. 191-2.

(4) D. C. Douglas, *op. cit.*, p. 269. (俗界従臣) Odo, bishop of Bayeux & earl of Kent. Robert, count of Mortain. William fitz Osbern. Roger of Montgomery. William of Warenne. Hugh, son of Richard, viconte of the Avranchin. Eustace, count of Boulogne. Count Alan the Red. Richard, son of Gilbert of Brionne the count (後々Clare). Geoffrey, bishop of Coutances. Geoffrey from Manneville

in the Bessin.

(俗界従臣) Evreux 及び Eu. Roger Bigod from Calvados. Robert Malet from the neighbourhood of Le Havre. Hugh of Grandmesnil. Robert and Henry the sons of Roger of Beaumont. Walter Giffard from Longueville-sur-Scie. Hugh of Montfort-sur-Risle. Ralph III of Tosny. ドゥムズデー調査までの間に、俗界従臣は全て国王の直属封臣になり封建制に組み込まれた。

(5) ケント(州)におけるノルマン系諸侯、同騎士らの侵奪については、鶴島博和「所謂 Norman Settlement について」『西洋史学』一二三(一九八二)二三〜二四頁。また、ケンブリッジ(州)を扱った、宮城徹「ノルマン征服と所領形成」『史学研究』(広島大学)一八六(一九九〇)、四一〜六二頁がある。D・ベイツ(朝治啓三、中村敦子翻訳・解説)「ノルマンディとイングランド、九〇〇年—一二〇四年」『関西大学文学論集』五四・一(二〇〇四)、二七〜四八頁、より特に三三頁を参照されたい。

(6) V. H. Galbraith, *Domesday Book—Its place in administrative History*, Oxford, 1974, p.19, pp. 56-64. リトル・ドゥムズデー・ブック(LDB)は、イースト・アングリア調査使節団の七名が記録に携わった。詳細な内容になっていて、一〇六六年当時の統計値及びその後一〇八六年にわたって記録され、各項目の変化が詳しい。農民及び彼らが誰に臣従の義務をもっていたかを詳細に記録しているこ

と、直営の家畜の数について報告されていることなどが、一人の人間でまとめられたグレイト・ドゥムズデイ・ブック (GDB) と違いがある。

(7) V. H. Galbraith, *op. cit.*, p. 155.

(8) Alexander Rumble ed., *Domesday Book 32, Essex*, Chichester, 1983, Notes 90, Invasiones (英訳では Annexations と訳されている)

(9) G. Munford, *An Analysis of the Domesday Book of the County of Norfolk*, London, 1858, p. 57.

(10) ノーリッチの発音については *nôr'ij* ノーリッチ、*nor'ich* ノーリッチ、*nor'ij* ノーリッチ、*nor'ich* ノーリッチの四通りもある (R. C. Preble, *Britannica World Language Dictionary*, Vol.1, Chicago, 1959 参照)。現地ではノーリッチが最も定着しているように思われる。

(11) B. Thorpe, ed., with a translation. *The Anglo-Saxon Chronicle* vol II, London, 1861, p. 192. (Original text written in Old English, p. 357.)

(12) S.A. Reilly, *Our Legal Heritage*, Chapter 4, *Martial Law*, 1066-1100, E Book #13376, Chicago, 2004, p.10.

(13) 'topography' については、次のように説明されている。一地方の地勢 (図)。地理学よりずっと小さい地域に関して用いる (「新グローバル英和辞典」より)。一地方の社会・経済・文化などの構造的特徴 (「プログレッシブ英和中辞典」より)。歴史地理学の手法は、まさにトポグラフィ

ィーであるが、少なくともわが国では、歴史GISの情報データベースを英国中世史地域研究に生かした研究例は少ないように見受けられる。

(14) 鶴島博和「ロチェスタ・ドゥームズデイ・ブック (Rochester Domesday Book) — その系統的解明と編集 —」『イギリス中世史研究会編『中世イングランドの社会と国家』山川出版社、一九九四、三六七頁。

(15) Great Britain Historical GIS Project, *Descriptive gazetteer entries for Norfolk*, pp. 1-6. (based on J. M. Wilson, *The Imperial Gazetteer of England and Wales*, Edingburgh, 1872)

(16) A. Doubleday and W. Page, ed., *The Victoria History of the County of Norfolk*, vol. 1, London, 1901, pp. 1-29.

(17) J. N. Jennings and J. M. Lambert, *The Origin of the Broads, The Geographical Journal*, 119, 1953, p91. 本号に関する総合報告は次の通り。J. M. Lambert, J. N. Jennings, C. T. Smith, G. Green and J. N. Hutchinson, *The making of the Broads: A Reconsideration of their Origin in Light of New Evidence*, Royal Geographical Society, Research Series, No. 3, 1960, pp. 1-153.

(18) D. Roffe, *op. cit.*, p. 157-176.

(19) G. Munford, *op. cit.*, pp. 4-53.

Godric Dapifer (ゴッドリック・ダピファー、王領地管理人) Godric Halden (ゴットリック・ハルデン) Rabel Artifex

(サクソン、セイン)・Hagon (サクソン、セイン、代官)、Ralph (サクソン、セイン、Hagonの息子)・Tovi (サクソン、セイン、州長官)・Ulchel (イングリッシュ、セイン)・Starcolf (デーン、セイン)・Alured (サクソン)・Aldit (サクソン)・Isac (ユダヤ、金貸業)・Ivikel (デーン、司祭)・Colebern (サクソン、司祭)・Bernar (サクソン、石弓射手)・Gilbert (サクソン、石弓射手)・Ralph (サクソン、石弓射手)・Robert (サクソン、石弓射手)・Edric Accipitarius (イングリッシュ、王の鷹匠)・王の自由民 (サクソン) に雇われた者九名、王の自由民 (サクソン) 十七名。

- (20) G. Munford, *op. cit.*, p. 26.
- (21) G. Munford, *op. cit.*, p. 100.
- (22) F. Blomefield, *An Essay Towards a Topographical History of the County of Norfolk*, London, 1740. Blomefield は彼について、当州に二五荘園を所有し (vol. vii, p. 321) 後に侵奪を含めて四二荘園を数えることができる、と言っている (vol. vii, p. 493)。

- (23) G. Munford, *op. cit.*, p. 88.
- (24) G. Munford, *op. cit.*, pp. 79-80. ドウムズディ・ブックでは教会の数は述べられていない。調査当時、存在していた教会はわかっていたが、記録しても意味がないと考えられていた。調査の目的は教会の数を正しく確認することではなく、征服王の目は課税可能な物権に固執していたからで

ある。

- (25) S. A. Reilly, *op. cit.* p. 5. ライリーは教会寄進の実体を教会の土地 glebeland に限定している。glebeland は「教会の土地」と訳されるが、その実体は「教会荘園」である。

- (26) 聖ベネット・オブ・ホルム修道院の歴史：八世紀半ば頃、デーン人に襲撃された古代修道院跡地に、デーン人のクヌート王が贖罪としてベネディクト派修道院を創建した。一〇二〇年より以前とされている。創建時からエドワード懺悔王に至るまで、王家からの寄進と特権により増大した。C.J. Messent, *The Monastic Remains of Norfolk & Suffolk*, Norwich, 1934, pp. 29-30. J. R. West, *St. Benet of Holme 1020-1210*, Norfolk Record Society Vol. II, 1932, pp. 190-191, 198-199.

- (27) F. M. Stenton, "Notes and Document, St. Benet of Holme and the Norman Conquest", *English Historical Review*, 37, 1922, pp. 225-235.

- (28) J. R. West, *St. Benet of Holme 1020-1210*, Norfolk Record Society, Vol. II ~ III, 1932, pp. 169-170.

- (29) Carole Rawcliffe and Richard Wilson, ed., *Medieval Norwich*, London, 2004, p. xxix.

イースト・アングリア地方史研究の「トポグラフィカル歴史分析」には伝統があり、F. Blomefield, *op. cit.* に始まる。個々の史料から、また史跡・遺跡の調査から歴史地図 historical atlas が作られ、検証に利用されるようになった。

ノーフォークに関する歴史地図は、こうした伝統的研究方法を背景に膨大な量が集積されている。一七九七年初刊の Faden's Map of Norfolk が二〇〇五年に復刻され、また A. D. McNair, *Digital Redrawing of Faden's 1797 Map of Norfolk*, London, 2005 が出版された。

- (32) T. Ashwin and A. Davison, ed., *An Historical Atlas of Norfolk*, Phillimore, 2005, p. 9. H. C. Darby, *Domesday Geography of Eastern England*, London, 1952, pp. 99-151. B. Orne and E. Orne, *Flint Building in Norfolk, Norfolk*, 1984, pp. 1-28. S. W. Martins, *A History of Norfolk*, Chichester, 1997, p. 30.

- (33) W. Shepherd, *Flint, Its Origin, Properties and Uses*, 1972. フリント Flint とは和名「火打石」のことと指す。

- (34) 田巻敦子、池上忠弘「マンブロー・サタン時代の教会区制度と教区司祭」『成城文芸』一六〇（一九九七）二一九頁。D. P. Mortlock and C. V. Roberts, *The Popular Guide to Norfolk Churches: Norwich and Central and South Norfolk*, Cambridge, 2007, pp. 1-400.

- (35) S. W. Martins, *A History of Norfolk*, Chichester, 1997, p. 31.

- (36) B. M. S. Campbell, "The Regional Uniqueness of English Field System? Some Evidence from Eastern Norfolk", *Agricultural History Review*, 29, 1981, pp. 16-28.

- (37) B. M. S. Campbell, "The Complexity of Manorial

Structure in Medieval Norfolk: Case Study", *Archaeology*, 39, 1986, pp. 225-61.

- (38) M. Canti, Ancient Monuments Laboratory Reports, Vol. 17, No. 59, Norfolk, 1994, pp. 1-10.

- (39) Broad Authority. Upper Thurne Water Space; Interim Management Plan 2004-2009, Norwich, 2006, p. 38.

- (40) J. N. Jennings and J. M. Lambert, *op. cit.*, p. 91.

- (41) Great Britain Historical GIS Project. *op. cit.*, pp. 1-6. 歴史 GIS (地理情報システム) データの活用は今後ますます必要とされる。

- (42) D. Dymond, *The Norfolk Landscape*, Suffolk, 1990 p. 31.

- (43) Norwich City Council, Norwich Heart, Discover Secret Norwich, 2006, pp. 1-51. Great Britain Historical GIS Project. *op. cit.*

- (44) M. David Knowles, *The Christian Centuries, A New History of the Catholic Church*, Vol. 2, *The Middle Ages*, London, 1969. 上智大学中世思想史研究所編訳『中世キリスト教の成立』(キリスト教史 三巻) 講談社、一九八一、二六八頁。Henry Pluckrose, *Monasteries*, London, 1975, pp. 93-5.

- (45) およそ一二七四年頃生存していた Sprott は、ドゥムズデイ調査がなされた時には、王国内に四五〇一の教区教会があったと主張した。しかし、Sprott の計算は間違っ

つらいつゝ多へ見積もり過ぎつゝるゝといわれてゐる。(G. Munford, *op. cit.*, pp. 80-81.)

- (44) Claude J. W. Messent, *The Monastic Remains of Norfolk & Suffolk*, Norwich, 1934, pp. 1-96.

- (45) A. Mee, *The King's England: Suffolk*, London, 1941, pp. 64-66.

- (46) *DB ii*, 174a.

- (47) Norfolk Archaeological Unit, *A Late Saxon and early medieval site at Mill Lane, Thetford*, Thetford, 1995, p. 3.

- (48) J. Campbell, *op. cit.*, p. 29.

- (49) F. M. Stenton, *op. cit.*, p. 230.

- (50) 米川伸一『イギリス地域史研究序説』未来社、一九七二、七八頁。

- (51) F. M. Stenton, *op. cit.*, p. 225.

- (52) 保有地を持たない彼らのことをドウムズデイ・ブックでは「freemen」としている。従来の解釈では、自由農民の中に自由民とソックマンを含めたが、最近では、自由民の中にソックマンが含まれる、という考え方に変っている。当時は耕す、掘り起こす、開墾する、採掘する、運び出す、選別する、これらは全て農作業として、区別がなかったのであらう。

- (53) F. M. Stenton, *op. cit.*, p. 228.

- (54) *DB ii*, 174b (Repps), 180a (Thrigby).

- (55) D. roffe, Little Domesday, Norfolk, the text of a

lecture delivered at the Assembly house, Noewich, 31 May, 2001, pp. 165. (www.roffe.co.uk/norfolk.htm)

- (56) 佐藤伊久男「イギリス封建制の発達過程における政治的権力構造」『史学雑誌』、七四—四（一九六五）、十九—二十頁、三八七—八頁。

- (57) *DB ii*, 174b.

- (58) D. R. Roffe, Anglo-Norman Studies 前掲論文 pp. 156-7.
 元々へ Ailwin. Ailwy of Thetford. Bondi. Edric of Laxfield. Godwin of Scottow. Hagni. Hagni of Cock. Harold. Osbern. Yoki of Winterton. Ulf. Withri. Wulfstan.

- (59) S. A. J. Atkin, The Bigod Family: An Introduction into their lands and activities, 1066-1306, University of Reading, unpublished Ph. D. Thesis, 1979, p. 19.

- (60) *DB ii*, Annexations in Norfolk (*Invasiones in Norfolk*), 273b-280a.

- (61) G. Munford, *op. cit.*, p. 57.

- (62) 鶴島博和「所謂 Norman Settlementについて」『西洋史学』、一二三（一九八二）、二四頁。

- (63) これについては田巻敦子「ノルマン征服と「悔い改め」の法令一〇七〇」『比較宗教思想研究』第八輯（新潟大学）二〇〇八年 一—二八頁、及び同「11・12世紀イングラントにおける告解制度—ノーリッチ司教ハーバード・ロジンの司教区改革にみる—」『欧米の言語・社会・文化』第14号（新潟大学）二〇〇八年、を参照されたい。

(64) ハーバート・ロジンガに関しては山代宏道「中世イングランド司教の統治戦略―ハーバートⅡロジンガを中心に―」『広島大学大学院文学研究科論集』、六六(二〇〇六)、四七―六五頁。

図1 ノーフォークにおけるピゴット家の所領分布 1086

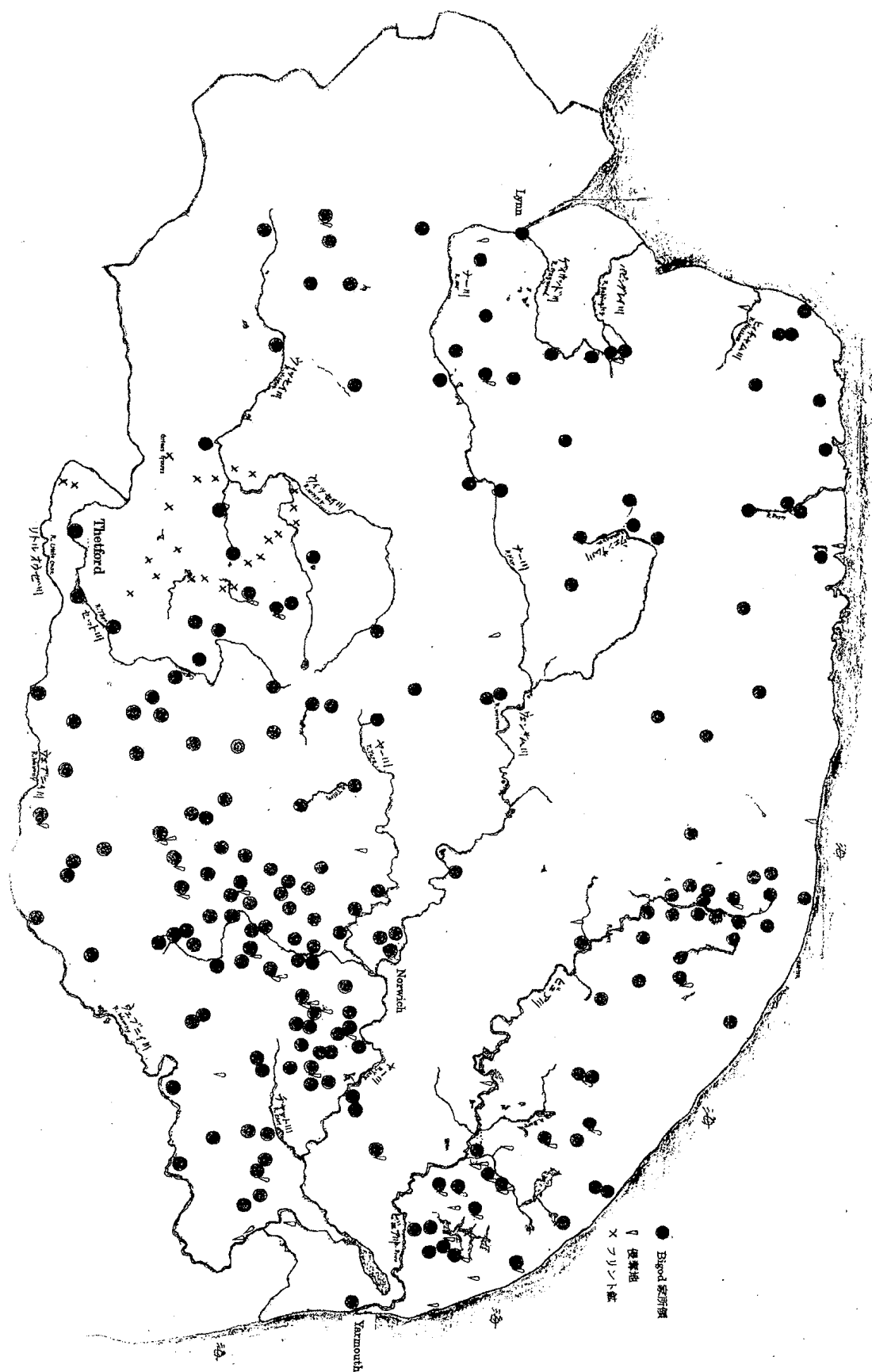
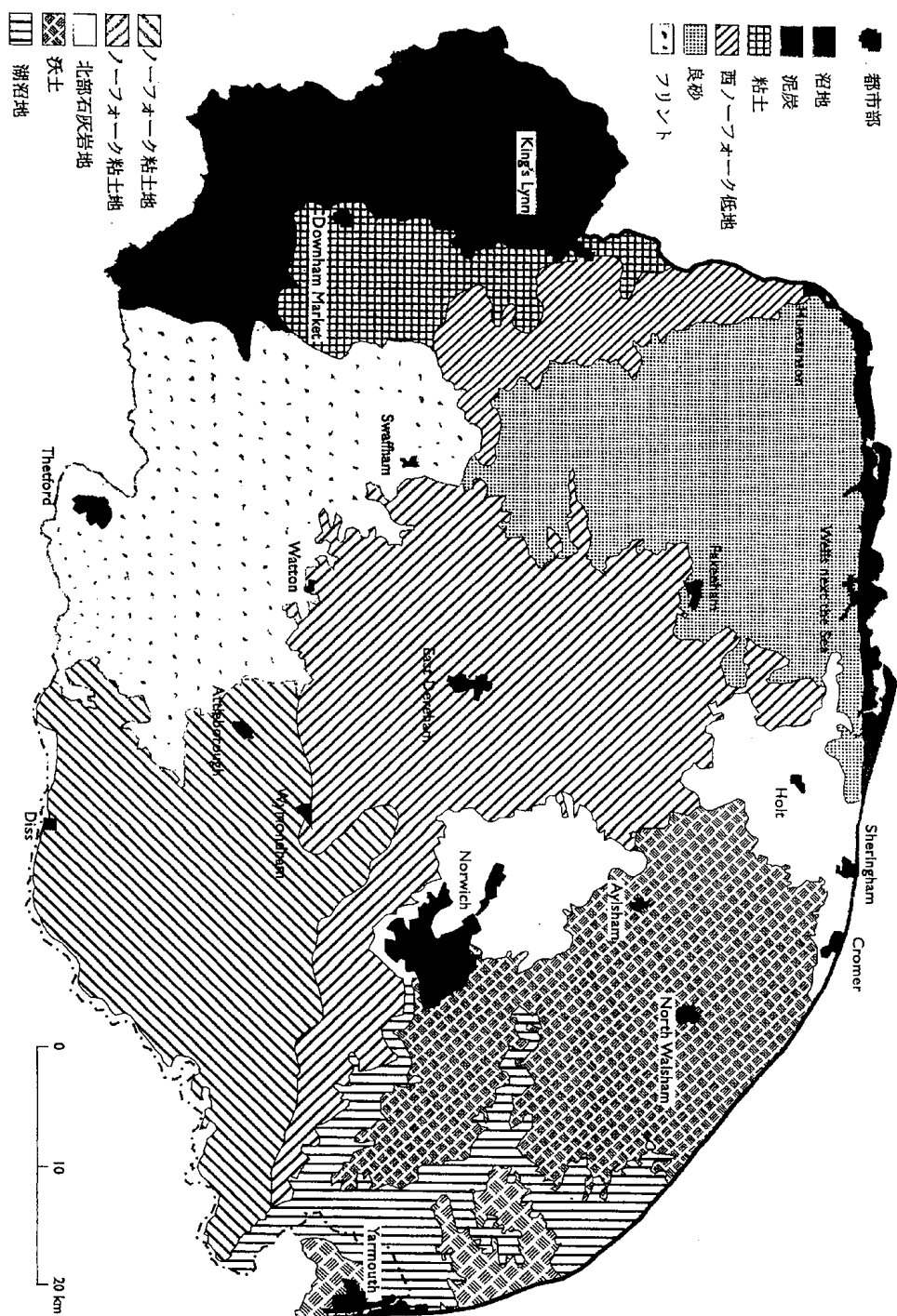


図2 ノーフォークの土壌分布



出典 *A Historical Atlas of Norfolk*, ed., T. Ashwin & A. Davison, Chichester, 2005.

表 1 ノーフオークにおける諸侯（直属封臣）の侵奪地

諸侯（直属封臣）	侵奪地 マナ数	1086 評価額	封土 マナ数	1086 評価額	前国王のセイndeノルマンの臣下に下った者
	£ s.		£ s.		
Herner de Ferrariis	32	20 19 9	22	67 0 8	Leofwold. Thorketel
Roger Bigod	16	2 6 9	187	281 18 0	Ailwin. Ailwy of Thetford. Bondi. Edric of Laxfield. Hagni of Cock. Harold. Osbern. Yoki of Winterton. Ulf. Godwin of Scottow. Hagni. Withri. Wulfstan Aethelgyth. Bondi. Bury St Edmund abbey. Herman. Ketel. Olova. Skuki. Thorkell. Toli Ulfketel
Rainald, son of Ivo	11	2 14 2	58	107 13 1	Harold. Thored. Gyrth. Skeet.
Ralph Bainard	6	6 0 0	52	172 16 1	
Peter de Valoines	6	4 0 2	17	70 10 6	
Ralph de Bellofago	6	14 11	52	124 8 11	
Bury St. Edmunds abbey	5	2 5 4	53	94 11 1	Bury St Edmund abbey. Gyrth伯. 州司法長官Toli.
William de Warene	5	1 10 4½	145	329 4 0	Aelfeva. Asford. Ely abbey. Harold. Osmund. Thorgrim. Toki.
Hugh de Montfort	4	6 13 10	17	60 5 0	Bondi. Ely abbey. Godmund.
Ely abbey	4	10 4	38	115 15 2	
Rainulph, brother of Ilger	2	1 1 4	7	10 16 4	Ely abbey
Rabel Artifex	2	12 2	2	4 10 0	
Ralph de Todeu	1	12 0	20	60 1 0	Harold
Robert Grenon	1	8 0	6	8 3 4	
Eudo Dapifer	1	2 0	9	22 4 0	Lisois of Moutiers. Turgis.
Rainulph Peverell	1	6	7	23 10 6	Bury St Edmund abbey. Ketel.

典拠： *Domesday Book, Norfolk*, ed., Phillippa Brown, Phillimore, Chichester, 1984.
David Robert Roffe, From Thenage to Barony: Sake and Soke, Title, and
Tenant-in-Chief, *Anglo-Norman Studies* 12(1990), 157-76.

表2 ノーフォークにおけるロジャー・ビゴットの侵奪地

ハンドレット	教区	略奪内容	1066以前の管理者	1066後の侵奪者	1086時の保有者	記載箇所
Flegg West	Somerton Thurne	1 自由民、30エーカーの土地、1 小屋住農 43エーカー、牧草地9エーカー、1アロウ	Haroldの1自由民 St Beneの下で1自由民	セイン Ailwy	Bigodの代官Ivo Roger Bigod	(DB ii, 277b) (DB ii, 277b)
Freebridge	Fitcham	10自由民、80エーカー、牧草地6 エーカー、2アロウ	大司教Stigandの下で某	セイン Ailwy	Walterの息子Ranulf	(DB ii, 277a)
Greehoe South	Holme(Hale)	1自由民の $\frac{1}{2}$ cの土地、 $\frac{1}{2}$ アロウ、 $\frac{1}{2}$ 粉引場			Hertwinの息子Ralph	(DB ii, 277a)
Henstead	Bramerton Bixley Poringland	16エーカーの土地、女性の下 $\frac{2}{3}$ の自由民、その他 17エーカーの土地、 $\frac{1}{2}$ アロウ、1農奴と1小屋住農 15エーカーの土地、 $\frac{1}{2}$ アロウ	Edricの下 $\frac{1}{2}$ の女性自由民 Aslacの下 $\frac{1}{2}$ の自由民 Edwinの下 $\frac{1}{2}$ の自由民	Aitard de Vaux Roger Bigod Bayeux司教	Aitard de Vaux Roger Bigod Roger Bigod	(DB ii, 277b) (DB ii, 277b) (DB ii, 278a)
Shropham	Snetterton Hockham	1自由民、5エーカー 1自由民、8エーカーの土地		セイン Ailwy セイン Ailwy	Hertwinの息子Ralph Hertwinの息子Ralph	(DB ii, 277b) (DB ii, 277b)
Wayland	Thompson Griston	1自由民、15エーカー、牧草地1エーカー、 $\frac{1}{2}$ アロウ 4自由民、26エーカーの土地		セイン Ailwy	Walterの息子Ranulf Walterの息子Ranulf	(DB ii, 277b) (DB ii, 277a)
Depwade	Hapton Tibenham	1自由民、15エーカーの土地 1自由民、15エーカーの土地土地、1 小屋住農		Bigodの侍従Herbert Walter Canute	Roger Bigod Walter Canute	(DB ii, 278b) (DB ii, 280a)
Holt	Weybourne	12 自由民、3cと15エーカー、1農奴、25小屋住農	Harold王の下でHugh伯		Walterの息子Ranulf	(DB ii, 279a)
Diss	Osmondiston	1自由民の財産と10エーカーの土地その他の半分		Bigodの家臣Corbon	Hugh of Corbon	(DB ii, 278a)
Flegg East	Filby	1自由民、51エーカー、1アロウ、牧草地 $\frac{1}{2}$ エーカー c: カルケイト	セイン Ailwy	Ralph伯	Ailwyの息子Stanard(?)	(DB ii, 278a)

典拠 Philippa Brown, *Domesday Book, Norfolk*, Chichester, 1984

1066以前の管理者	1066後の侵奪者・横領者	1086時の保有者	侵奪時期
St Benet	セインWalter、Roger Bigod	Bigod(DB ii, 187a)	前(D. B.)
セインEdricの下で自由民	セインWalter	Bigod(DB ii, 187a)	前
St Benet	セインOswald	St Benet(DB ii, 218b, 219b)	後
	Do	Roger of Poitou(DB ii, 244b)	前
	Do	Roger of Poitou(DB ii, 244b)	前
St Benet	セインOswald、Roger Bigod	St Benet(DB ii, 220a)	後
	Robert Dulum	Bigod(DB ii, 180a, 187b)	?
	Roger Bigod	Bigod(DB ii, 179b)	前
	Do	この地の記録なし	?
St Benet	セインUlf	Bigod(DB ii, 174b)	前
1自由民	Do	Bigod(DB ii, 174b)	前
2自由民	Do	Bigod(DB ii, 174b)	前
セインAilwyの下で1自由民	Do	Bigod(DB ii, 174b)	前
セインEdricと自由民Ringwulfの下で2女自由民	セインOswald	Bigod(DB ii, 174b)	前
セインEdricの下で自由民Ringwulf	セインAilwyと息子Stanard	Bigod(DB ii, 174b)	前
	Do	この地の記録なし	?
自由民Ringwulf	Do	Bigod(DB ii, 174b)	前
	Do	Bigod(DB ii, 174b)	前
	Do	Bigod(DB ii, 174b)	前
	Do	Bigod(DB ii, 174b)	前
	Do	Bigod(DB ii, 174b)	前
	Do	Bigod(DB ii, 174b)	前
修道院長	Do	Bigod(DB ii, 174b)	前
Aelmer司教	Do	Bigod(DB ii, 174b)	前
セインAilwy	セインAilwy	Bigod(DB ii, 174b)	前
セインAilwy	Do	Bigod(DB ii, 174b)	前
セインAilwy	Do	Bigod(DB ii, 174b)	前
	セインAilwyと息子Stanard	St Benet(DB ii, 216b)	後
	Do	St Benet(DB ii, 216b)	後
セインThetfordのAilwy	セインAilwy	Bigod(DB ii, 174b)	前
セインEdricの下でソックマンUlfketel	セインAilwyと息子Stanard	Bigod(DB ii, 174b)	前
	Do	Bigod(DB ii, 174b)	前
	Do	Bigod(DB ii, 174b)	前
Gyrth伯の下でセインAilwy	セインUlf	Bigod(DB ii, 180a)	前
セインAilwy	Do	Bigod(DB ii, 180a)	前
セインAilwy	Do	Bigod(DB ii, 180a)	前
	Do	Bigod(DB ii, 180a)	前
セインAilwy	Do	Bigod(DB ii, 180a)	前
カンタベリ大司教Stigandの下でセインUlfセインWaleran、Ivo de Verdum	Bigod(DB ii, 185b)		前
	Roger Bigod	Bigod(DB ii, 176a, 278a)	前
	Do	Bigod(DB ii, 175a, 185a)	前
	Do	国王の自由民Godric of Heigham(DB ii, 272b)	前
	Do	国王の自由民Godric of Heigham(DB ii, 272b)	前
	Do	国王の自由民Godric of Heigham(DB ii, 272b)	前
	Roger Bigod	Bigod(DB ii, 181a, 185b, 189a)	前
	Ivo de Verdum	Bigod(DB ii, 181a, 189b)	前
	Do	Bigod(DB ii, 181a, 189a, 190a)	前
	Do	Bigod(DB ii, 180b)	前
	セインWalter Canut	Bigod(DB ii, 181a, 189b, 190a)	?
	Do	Bigod(DB ii, 181a, 189b, 190a)	?
	Colesrode	不明	?
自由民Alby、Withri、Wufstan	セインOswald	Bigod(DB ii, 179b, 184a, 184b)	前
49自由民	Do	Bigod(DB ii, 179b)	前
	セインAilwin of Basingham	Bigod(DB ii, 179b)	前
	Roger Bigod	St Benet(DB ii, 217a)	後
	セインGoutiと仲間	Bigod(DB ii, 184b, 187a)	?
	Roger Bigod	St Benet(DB ii, 218a)	後
	セインOswald	Bigod(DB ii, 184b)	?

表3 「ロジャー・ビゴットと家臣が聖ベネット・オブ・ホルム修道院から
侵奪した土地のリスト」

ハンドレッド	教区	略奪内容 (人)	略奪内容 (土地)
Tunstead	Smallburgh Dilham Horning Westwick	自由民3人 ソックマンUlfkitelo, 住民を奴隷に ソックマンLiffi ソックマンHoward	3自由民の土地 Ulfkiteloの土地 Cnut王がSt Benetに寄進した土地 Liffiの土地全て Howardの土地全て
Happing	Ludham Stalham Catfield Walton	 Bondusと妻	土地の全て 6ヶ所の牧草地と森林 Bondusの家屋に続く2エーカーの土地 Waltonの2エーカーの土地
Flegg West	Sutton Clippesby Ormesby Billockby Bastwick Bastwick (?) Denemarke Oby	 Ringolfと2女自由民	Fleggにある土地の半分 土地の半分 土地の半分 土地の半分 土地の半分 Ringolfの家屋と土地13エーカー 13エーカー Denemarkeにある修道院長の土地 国王とSt Benetが管理する土地 Lefchildの家屋と所有物の半分 Elfrediの所有物の半分 Snuningiの所有物の半分 Scotlandeの所有物 Clypesbyの司祭Godriumの土地 Aileue所有の半分
	Repps	Lefchild (Leofchildi) Elfredi Snuningi Scotlande Godrium Aileue Bonde Pine Bondumの息子OfflesとLefchild Wlfnerumの息子Sirici Hawardの息子Tudeles	
	Ashby	大工TukkeとEstan Edwiniとその家族	TukkeとEstanと彼らの土地 Edwiniと家族の所有地
	Somerton W. Burgh St. Margaret Thurne	自由民 Anundi Eluiueほか3人 Vlfketeli(Ulfkitel)	Anundiの土地の半分 修道院長Alfwoldiの土地と3人の所有地 Vlfketeli(Ulfkitel)所有の土地の半分 修道院長Alfwoldiの4住居
Flegg East	Trigby Runham Filby Ness Mautby		土地の半分 土地の半分 土地の半分 土地の半分 土地の半分
Henstead	Saxlingham-Thorpe Poringland Shottensham Heigham	ソックマンColsweyn、Langebeyn、 Trunwine、Stannard、Anundと小屋住農 Elwine Ecses Edelwold Elfpricum	PoringlandとShottenshamの間の15エーカー Do Ecses所有の全て Edelwold所有の半分 Elfpricum所有の半分
Depwade	Fritton Wacton Moulton Aslacton Tibenham 地名不詳	 ColemanとWlricus 修道院所属の奴隷 Ringolf 荘園の小屋住農多数	6エーカーの土地 広大な森林全て 教会の土地半エーカー、複数の家屋 広大な森林全て 2家屋と所有の全て Ringolfの家屋と森林
Erpingham N.	Sustead Thurgarton Greengewill Antingham Thwaite Scharstede	Elfgavi 女BlideとTervieのテナント4人 Thurgartonの某 Wymondhamの司祭 テナント数名	Elfgariの家屋及び荷車 合わせて20エーカーの土地 同某の家屋に続く2エーカーの土地 同司祭の住居、12エーカーの牧草地 多くの土地、牧草地4ヶ所 2.5エーカーの土地 3エーカーの土地
典拠	St. Benet of Holme Abbeyの記録簿「List of encroachments on the Abbey's lands by Roger Bigod and his men」. P. Brown, ed., <i>Domesday Book, Norfolk</i> , Phillimore, Chichester, 1984. より作成		